

にわか仕立ての愛国者で自国を“防戦”

7月に入ると、最初の月曜日に再びクラス（レベル）分けの試験が行われました。試験の要領は6月のときと同じでしたが、質問の内容が文法的にやや難しくなっていました。「間接法」の使い方を問うものがかなり出題されていたのです。幸いにもそれなりに頑張った6月の勉強の成果が反映されて、かなりのよい出来だったと思います。

翌火曜日。クラス分けの発表です。レベルが一つ上がっていました。「D1」——「上級の下」というところです。先の「C2」から上がってきた仲間が5人。もともと「D1」だった（つまり昇級できなかった）人、すでにかかなりのスペイン語力はあるが、お国の大学が夏休みで、この機会にマラガ大学の夏季コースを修めにきた人等々で計16人。国籍的にはまた多様性を増しました。

6月には無かった出身国を挙げていくと：ユーゴスラビア、エストニア、イスラエル、アルジェリア、メキシコの5カ国。エストニアからの40代の壮年・リストはフィンランド生まれ。完全なスキンヘッドで往年のユル・ブリンナーに似ています。現在、離婚中という。アルジェリアの首都アルジェからのサミエルは、30代の技師。



左から筆者、イスラエル、イギリス、アメリカ、日本の仲間たちアラブ系白人のすらりとした長身にちょび髭。ソフトな振る舞いを見ていると、とてもアフリカからとは想像がつかない。（こういう先入観が、無意識のうちに人種差別意識を醸成していることを、自分も気をつけなければならないだろう！）

他は、みんな現役の大学生のようでした。メキシコからという女子は、現在、アメリカに住んでいて、家庭で親との会話で身に付けたスペイン語で日常会話に問題はないけれど、正しい文法の修得が必要でスペインまで来たのだといいます。

カリキュラムには大きな変化がありました。これまで、1日に文法2時間、会話2時間だったのが、今度は、文法1時間（担当教師：ローラ）、会話1時間（同）のほかに、スペイン文化コースとして、スペイン史1時間（同：アナ）、観光概論1時間（同：カルメロ）が加わったのです。名前で推測がつくように、ローラもアナも女性。どうもここでは女性の教師陣が優勢のようです。

文法はまず「間接法」の復習から。会話はその都度テーマが変わるのですが、面白いと思ったのは、生徒の出身国別に、その国や国民性の長所や短所を指摘しあうものでした。その国の出身者を傷つけかねない、きわどい発言もあります。喧々諤々（けんけんがくがく）、それぞれ俄（にわか）仕立ての“愛国者”になって、自分の国を“防戦”しようと必



死になって言葉を探すのは、会話の上達には適しているのかもしれない。

一つの国に多国籍の人々が住んでいるスペインのような国からすれば、移民を制限し、難民の受け入れさえも後ろ向きな日本は、極めて特殊な国に映るようです。私もクラス仲間から「タケシ！あんたの国は自動車やテレビなど世界中に送り出しているけど、外国人の受け入れではずいぶん厳しいよね。ハポンでは昔あったという鎖国の状態が今なお続いているんじゃないの？」なんて突っ込みを入れられたりもしたのです。

スペイン史は、市民戦争とフランコ独裁の現代史が中心。観光概論は、スペインの観光のよって立つ背景について理論的に検証するもの。その国を訪問する外国人観光客の数からすると、スペインはフランス、アメリカに次いで世界第3位の位置を占めているからです。さすが留学生までに自国を売り込む“観光立国”スペインの授業ですよ。